災害多発時代の看護教育

喜多　悦子（日本赤十字九州国際看護大学）
山勢　善江（日本赤十字九州国際看護大学）
上村　朋子（日本赤十字九州国際看護大学）

過去十数年、世界は「災害時代」にあるともいえる。
例えば、過去30年にわたり、世界の災害紛争の実態を調査し、disaster epidemiology（災害疫学）分野を確立したベルギールーバン大学のCRED（the Centre for Research on the Epidemiology of Disasters. http://www.cred.be/　）は、1900年からの10年には28だった大型気象関連災害は、1950年からの10年には232に、さらに1990年代には2,034に増加し、2000年代の最初の5年間だけで、早くも2,135を記録していると発表している。

近年、災害看護や国際看護が必修化されたことは、国の内外を問わず、緊急時に素早く対応できるhealth professionalとしての看護師の役割を思えば、まことに時宜にかなったものとはいえるが、では、その教育体制は整っていたであろうか？また、将来、災害看護教育を全国展開すれば災害看護専門家養成はまっとうできるのだろうか？

過去20年以上、国際保健分野にかかわった中で喜多が学んだことは、看護職を含め災害医学の専門家がいるところを選んで災害は発生しているのではないが、何処でも何時でも、如何なる災害であれ、それが発生したところの大多数の被災者の近傍に存在する多数のhealth professionalは看護師であったということにつきる。

自然災害のみならず紛争を含めた現場で云えることは、できるだけ多数の看護師、極言すればすべての看護師が紛争を含め、災害についての基本的知識と被災者救援の基礎実技を修得しておけば、何時、何処で、どのような災害が発生しようとも、初動体制を含め、被災者の無用の身体的精神的社会的健康障害はminimizeできることである。そのためには、災害看護を特殊領域とせず、何処でも行われている普遍的看護教育の中にどう組み込むかを考えればよい。基本的考えとしては、ｉ）Disaster cycle（災害サイクル）の理解と、ii）Triage（トリアージ）という過程の必要性とその手法の理解　　につきる。

ここでは、日本赤十字九州国際看護大学の学部災害看護とクリティカルケアの連携をもとに、災害多発時代の看護師が身に着けておくべき科学的知識と実践の手技を解説したい。